

「お前所何品でも賣るかへ」

「へエ、何品でも商ひます」

「彼の暖簾の間から首出してゐる人形、あれ奇麗に鼻を拭いて何程や」

「これは恐れ入ります……、子供頭をひつこめて居、彼れは私の倅で」

「お前さんの息子はんか、不都合な息子を造らへたんやな、彼んな倅大きなつてもろくな者になれへんで、今の間に賣て仕舞ひ」

「うだく、仰つしやるな、一人しか無い倅で彼れを賣つたら跡取が無くなります」

「無かつたら又造らへんかいな」

「造らへんかいなと云ふて手細工で出来る物やおまへん」

「そこをうんと氣張つて」

「何程氣張つても私の様な年になつたら駄目です」

「そんなら私が手傳うて造らへよか」

「イヤ、それには及びまへん」

「こらまあ嘘や、彼の棚に有る頭の長い人形、彼れは何や」

「へエ、福祿壽と申しまして値段が百七十ですが、百六十に負けておきます」

「何や百六十が百七十やが、百六十に負けるのか」

「イ、エ、福祿壽百七十を百六十に負けますので」

「値を聞いて居て肩が凝つた、此の小さい人形は」

「へエ 饅頭喰ひの人形で、此方が文使い、之が虚無僧の人形、此の人形は肌身に附けて頂きますと船などに酔ぬ呪ひで」

「是は何や」

「へエ、寢丑と申しまして、持てお歸りに成りまして床などへ祀つて置ますと、子供に瘡が出来たら此の丑に、ぼんの瘡を食べて呉れ、嬢の瘡を食べて呉れと頼むと、不思議とその瘡が癒りますね」

「お醫者はんみきたいな丑やなア」

「値は何程や」

「三百だす」

「此の小さい汚い丑が三百とはねうしが無いな、丑にも種々あるなア」

「へエ、是か黒丑で、是が赤丑、此方が斑丑、彼れがこつて丑だす」

「私の云ふ様な丑は無いか」

「何んな丑だす」